

日本語の呼び掛け語

陣内, 正敬

<https://doi.org/10.15017/2332628>

出版情報 : 文學研究. 83, pp.149-161, 1986-02-28. 九州大学文学部
バージョン :
権利関係 :

日本語の呼び掛け語

陣 内 正 敬

0. はじめに

日本語の呼称については鈴木孝夫(1973)のパイオニア的研究以来、すぐれて社会言語学的テーマであるにもかかわらず、その包括的研究については寡聞にして知らない。英語との比較という意味で、久野(1977)、鈴木(1982)、パン(1982)、中村(1983)など、男女差という観点から井出(1982)、若者の敬語行動という点から井上(1979)などに触れられている。呼称は待遇表現の一部であるが、国語学関係からこの方面へのアプローチはほとんどが形態論レベルの敬語法についてである(北原 1978 など)。

海外では欧米を中心にかなりの文献がみられる。Brown(1960)がその出発点となって、英語圏ではBrown(1964)、Ervin-Tripp(1969)などがあり、その他の言語でもこれらの論考を踏まえた調査研究が多い。

小論は、鈴木(1973)の枠組とErvin-Trippの記述方法に刺激され書かれたものである。従ってここで用いられる用語(自称詞、対称詞など)も氏らの考えに依っている。最終目標は日本語の呼称体系をErvin-Tripp流の図式でまとめあげることであるが、日本語に存在するあらゆる呼称を一度に扱うのは避け、より典型的と思われる次のような項目に対象を制限してその体系化を目指したい。

1) 成人の呼称体系であること。子供の体系は成人のそれとは若干異なり、完全な日本語の文法を備えているとも言えない。

2) 扱う呼称は対称詞の呼格的用法(鈴木 1973: 146)に限ること。つまり相手に面と向って呼び掛ける場合のみを対象とすることになる。これは代名

詞的用法（同：147）も呼格的用法に準じることや、直接聞き手に呼び掛ける状況が具体的にイメージされやすいことなどのためである。また自称詞（同：134）については、親族名称の虚構的用法（同：158）など日本語独特の呼称法を考えると、対称詞の対応物として見えてくるように思われ、順序としてはまず対称詞の体系化が先決である。

3) 分析の材料となる呼び掛け形式は、姓（以下 LN）、名（同 FN）、親族呼称（同K）、地位・役職名（同T）、職業名（同 OCP）で、そのそれぞれに敬称辞—サン、—クンの添えられる場合と呼び捨て— ϕ の場合を考える。従って、

4) 文体レベルでみればフォーマルなスタイルのみを扱うことになる。小論で考えるグループごとに発話場面の一応の目安を示すと、親族が分析対象となる場合には法事や親族会議など親族が一同に会する場面や、目上のお客さんをもてなしている座敷など、学校生活では授業中やクラス会、職場では工作中や会議中、近所づき合いでは PTA などが典型的なものである。ただしこのように、インフォーマルなスタイルを除外することで様々な興味深い現象に目をつぶることになってしまうが¹⁾、この点については改めて論じたい。

5) 話し手の心理状態（mood）によって同一対象にいくつもの呼称が考えられるが、ここではごく中立的なものと考え、軽卑語や罵倒語あるいは皮肉的表現などは除外する。

なお資料は筆者（1954年佐賀県生まれ、男性）の内省が主で、これに九州大学文学部言語研究室のメンバー（ほとんど九州出身）の内省も若干考慮してある。従って厳密に言えば九州地方の一人の呼称体系ということになるが、地域方言的表現は除き、日本語として一般化できるよう努めた。

1. 呼称は人間関係の反映であるから人間の持つ様々な生活空間により分類することができる。ここではそれを、親族間、学校生活、職場、近所づき合い、非日常の5つに分け、この順で考察してゆく。

1.1. 親族間での呼称

鈴木（1973）にかなり明瞭にまとめてあるが、敬称の意味を中心に少しつけ加えてみる。表1は呼び掛け語のリストを簡潔に整理したもので、これに敬称がどのように添えられるかを示したものである。○印は結合可能なペア、△印はそれほど一般的ではないがある状況では可能なペアである。これによると、一サンは K につくのが一般的ルールであるが、FN につく例も2つある。義弟、義妹に対するものと妻から夫へのものである。この両者は性質の異なるものであり、前者は実の兄弟ではないという改まりの心理から来るものであり、後者はいわゆる女性の品位保持意識から来るものである。なお夫婦間では子供が生まれると子供の立場に立った呼称、オト一サン、オカーサンなどもよく使われる。一サン欄の△印（FN+サン）については、年下であったり自分の子供であったりしても、相手が成長し独立した生計を営むようになった場合に特に母親から聞かれるようだ。φ 欄の△印は、最近の風潮としてごく若い夫婦にたまに見受けられるものである。

この表を一言でまとめれば、目上には K，そうでなければ FN，また目上に改まりのある時には一サン，そうでなければ一φ，一クンは家族外の目上でない男子へということになる。意味素性表の形でまとめれば次のようになるであろう。なおこの試みは 1.3. でより包括的になされる。

	K	FN		-サン	-クン	-φ
目上	+	-	改まり	+	+	-
			男子		+	

1.2. 学校生活

成人の文法ということで大学レベルを例に取る。表2は教官と学生の2グループに分けて考えてみたものである。教官は学生に対し LN クン，学生は教官に対し (LN)「先生」と両グループ間の呼称は明瞭に固定している。教官内部では一般に LN サンか (LN)「先生」を(サンづけより心理的距離を置いた印

表 1

本人との 関 係	呼 称	敬 称			例
		サン	クン	Ø	
父	K	○			オトーサン
母	K	○			オカーサン
兄	K	○			オニーサン
姉	K	○			オネーサン
弟	FN		△	○	タロー
妹	FN			○	ハナコ
祖 父	K	○			オジーサン
祖 母	K	○			オバーサン
お じ	K	○			オジサン
お ば	K	○			オバサン
いとこ♂	FN		○		タロークン
いとこ♀	FN				ハナコチャン
甥	FN		○		タロークン
姪	FN				ハナコチャン
義 兄	K	○			オニーサン
義 姉	K	○			オネーサン
義 弟	FN	○			タローサン
義 妹	FN	○			ハナコサン
夫	FN	○		△	ハナコ
妻	FN			○	タローサン
息 子	FN	△	△	○	タロー
娘	FN	△		○	ハナコ

表 2

		呼 び 掛 け ら れ る 側		呼 び 掛 け る 側		
		年 輩	若 手	先 輩	同・後輩♂	同・後輩♀
教 官	年 輩	LNサン		LNクン* LNサン		
	若 手	(LN)先生				
学 生		(LN)先生		LNサン	LNクン**	LNサン

* 一般に男性教官から学生に対する場合、男子には LN クン，女子には LN サン，女性教官からの場合は男女問わず LN サンである。

** 女子学生が男子学生をクンづけで呼ぶ習慣はごく最近のもので、(それまではサンづけ)，現在の40才を中心にその過渡期があるようだ。

象がある)，若手から年輩教官へは (LN)「先生」である。学生間では同輩・後輩への呼称で男女差が出てくる。男性にはクンづけ，女性にはサンづけが固定しているが，これは割と新しい現象のようである²⁾。親族呼称にみられるサン/クンの対応関係とはほぼ平行しているが，年下の女性にサンづけするのが特に学校という社会に特徴的なことのようにである。

「先生」は非常に特異な呼称であり，後に触れるように一般の T とは同一視できない。

1.3. 職 場

会社により部局により様々な相違があるが，全体的に見ると，上司には役職名，部下にはクンづけ，同輩・同ランクの場合には一般にサンづけで，特に女性から男性に対しては学生時代の名残りであろうかクンづけも聞かれる。Tサンも女性の中でよく聞かれるが，これはやさしさ，柔かさという意味での品位

表 3

		呼び掛けられる側		一 般		
		役 職		先 輩	同・後輩♂	同・後輩♀
呼び掛ける側		部 長	LNサン	LNクン	LNクン	
		課 長		LNサン		
	一	T		LNサン	LNサン ^{**}	LNサン
	♂	-----			LNクン ^{**}	
	般	T(サン) [*]				
	♀					

* 女子社員に「部長さん」、「課長さん」などのTサンが見られる

** 学生時代の習慣の名残りで、♀→♂でもクンづけが見られる

その他、「民主的」な会社などでは全てLNサンに統一しているところもある。

保持意識の現れと思われ（文化庁 1975：28，国文学編集部 65-76 など），Tの呼び捨てよりはインフォーマルな印象を与える。これは LN にサンづけするか呼び捨てるかの違いと比較してみると一見矛盾したことに思える。つまりサンづけは一般に丁寧な言い方であるのに，T サンはどうして T よりもインフォーマルなのかという問題である。

まず人間の所属集団を「内」，「外」の二項対立で下位集団に分割してゆけば，大雑把に親族，職場仲間（同僚），他人の三つになるであろう。

T は自分と相手が「内」なる関係にあることを含意している。一方 LN は基本的に「外」なる関係である。また サンづけは丁寧さや改まりを表わし「外」なる関係を含意するのに対し，呼び捨ては「内」なる関係を表わす。従って表 4 のような 4 種の組合せを考えると，内×内：T（うちわでの飾り気のない呼称）と外×外：LN サン（最も疎遠な関係を表わす呼称）がフォーマルであり，内×外：T サン（外部の者からの呼称か女性的呼称）と外×内：LN

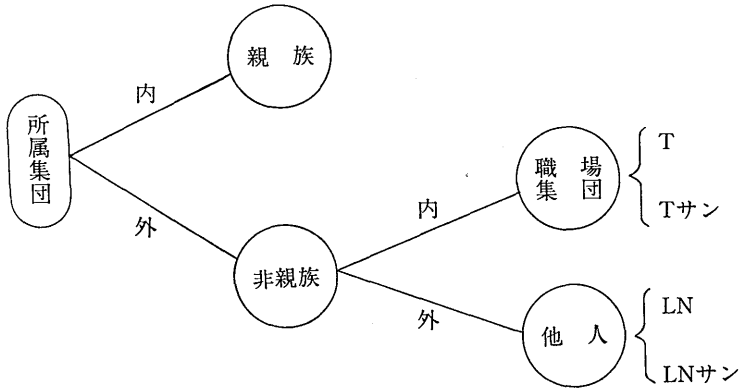


表 4

	内：∅	外：サン
内：T	T	Tサン
外：LN	LN	LNサン

（男性同志の親しみを込めた呼称）はインフォーマルなものとなる。このことは親族内にも当てはまるものであり、本来「内」なる性格の FN はきわめて「内」なる兄弟間で呼び捨てにされ、「外」意識の働く義兄弟間では FN サンとなる。

ここでこれまでの分析をまとめる意味で、1.1. で試みた意味素性表を拡大改訂してみる。

表 5 a

	LN	T	FN	K
目上	-	+	-	+
内	-	+	+	+
外	+	+	-	-

表 5 b

	サン	クン	Ø
改まり	+	+	-
親密さ	-	+	+

表 5 a の素性, 「目上」, 「内」, 「外」, などは制度上, 組織上決められたいはば客観的關係である⁴⁾。一方表 5 b の「改まり」, 「親密さ」⁵⁾ の話者の主観的判斷が反映するものである。従って例えば FN サンと FN クンは親密さにおいて異っているし, FN と LN サンは「内」, 「改まり」, 「親密さ」において異なっているということになる。なお一般に女性は呼び捨てにすることを嫌う傾向にあることを付け加えておく(例えば夫婦間, 父親と母親の子供たちへの呼称, 男性教師と女性教師の生徒への呼び掛け, あるいは職場での上司の呼称など, いずれも女性の方にサンづけが多い)。

1.4. 友 人

Ervin-Tripp (1959) その他によれば, 欧米圏では同僚と友人を区別する必要はない。これは同世代間であれば知り合いになる年齢を問わず, すぐお互いに FN で呼び合うことによる。一方日本語では, FN で呼び合えるのは小学校かせいぜい中学校までに知り合った仲に限られ, その後はいくら気が合い親しい仲になっても LN しか許されない。例外は恋人同志の場合で, FN (普通お互いにサンづけ) で呼び合うことは, お互いに他の同性からは区別された特別な関係にあることを示す。

1.5. 近所づき合い

一般的には LN サン。小さい頃からつき合いのある年輩の人には (FN) オジサン, オバサンなども可能であろう。また幼友達で普段は FN で呼び合っている仲でも, PTA の会議のような改まった場面ではやはり LN サンを用いるであろう。

1.6. 非日常のつき合い

普段に声を掛ける機会のない相手に対する呼称では、タクシーに乗る場合には「運転手さん」、家の修理を頼む場合には「大工さん」などほとんど「職業名サン」で済みます。やや親しみを込めたり、見下げたりした言い方に「運ちゃん」や「運転手くん」などがあるがここでは考えない。

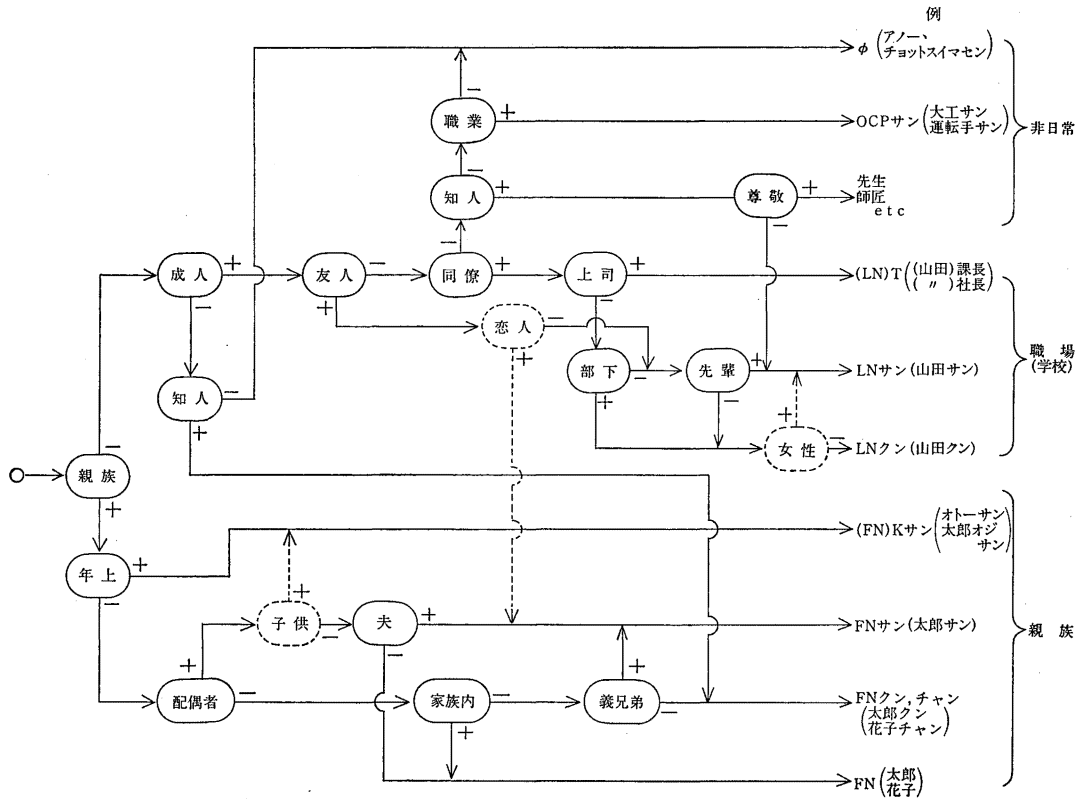
また見ず知らずの人には「ちょっとすみません」、「あの一」など、子供に対しては、「ちょっとごめんなさい」や「ちょっと僕」、「お嬢ちゃん」などが使われる。

1.7. 先生，師匠，親方など

これらは T の一種とも見故されるが、「課長」、「社長」などの職場での T とは性格が異なる。ひとつには呼び捨てにしたとしても決して内意識は感じられないし、むしろこれらにサンづけされることの方がめずらしい。また熟練の要る専門を身につけた少数者にしか使えないという点でも異っており、例えば代議士、弁護士、作家、芸術家、芸能家、医者などのいはば一般人の“尊敬”を集めている人に与えられるものである。学校の教師は上下、男女に関係なくお互い「(LN) 先生」で呼び合うが、これは生徒の視点に立った一種の虚構的用法と考えられる。

1.8. 以上のことを Ervin-Tripp 流のフローチャートとしてまとめたのが次の図である。

○の中の“素性”は呼び掛けられる側の属性や、呼び掛ける側にとっての関係を表わしている。⊖は“optional”という意味である。この図は我々の頭の中で起きている呼び掛けのプロセスを表わしているのではなく、ある呼称にはどのような“素性”が関与しているかを示している。なお繁雑さを避けるために呼び掛ける側の属性は表示していないが、必要な際には本来ならば別種の記号で表わすべきである。例えば妻から夫へのサンづけは、女性の品位保持のためのものであり、妻の夫への服従を意味するのではないわけであるから⁹⁾、表示法としては(夫)の代わりに◇妻とでもすべきところであろう。



2. おわりに

呼称というのは一瞬にして自分と相手との社会的関係を決めてしまうだけに、相手をどう呼ぶかについて我々はよく悩む。また日本人が外国語を学ぶ上でも、逆に外国人が日本語を学ぶ場合でも避けて通れない事であり、カルチャーショックの典型的な例としてよく話題にも上がるが、実際の記述となるとあまり注目を引かない。

日本語の呼称体系のごく一部をなんとか明示的に体系化しようと努力したわけだが、ヴァリエティーの多さに茫然となって避けて通った点もある。今後は第1章で設けた制限を徐々に解除し、より包括的な記述を目指したい。特に場面の改まり度と呼称のヴァリエティーとの関係は興味深い。また年輩層の体系も調査することによって共時的記述から通時的記述への展望も開いてゆきたい。社会制度や価値観の相違が、呼称体系という言語的側面においてはどのような形で現れてくるのか興味あるところである。

注

- 1) インフォーマルなスタイルにはチャンづけや、男性同志でのみ聞かれる LN の呼び捨てなどおもしろい現象がある。後者については、Lakoff (1975) の中に、米国でも同様である旨の報告があり、それに関しての見解も述べてある。また九大文学部外人教師の Bouvier 氏によるとフランス語でも同様であるとのことであった。この共通の現象が何を意味するのか興味深い。
- 2) 女生徒が同輩や後輩の男子生徒にクンづけするのは、教師の側からの呼称（男子生徒にはクン、女子生徒にはサンづけ——これは主に小、中、高において）が生徒同志にまで及んだ誤った用法であるということや（国文学編集部：74）、実際の敬語指導の際の留意点としてクンづけはやめさせるべきだ（文化庁 1974：74）などの意見がこれまでの敬語論議に見られる。しかし筆者の世代では、この使い分けは完全に定着しておりもはや変えようのないものとなっている。そして職場にも一部持ち込まれているようだ。
- 4) 4つの項目を区別するには一般に2ケの素性があれば十分であり、理想的でもある。ここでも LN の「内」素性に負の値を与えれば都合がいい（次頁の素性表参考）。

	LN	T	FN	K
内	-	-	+	+
目上	-	+	-	+

しかし本文で3ヶの素性を用いたのは、人間の「内」意識には“血縁的内意識”と“社会的内意識”があり（本文ではこの両者をそれぞれ「内」、「外」と名づけている）、この両者がKとTを区別していると考えたことと、これから項目が増して行った場合にいずれ必要になるということからである。

- 5) 1.1で「男子」とした素性をここでは「親密さ」に変えたが、これは扱う対象を親族から社会生活にまで広げるとクンづけが単に男性に対してと限らないからである。親族内や幼児に対するクンづけは、ここで扱ってないチャンづけと対立するものであり、この点に関してはチャンづけも含めた考察が必要である。一方大人の社会生活に見られるクンづけは、何らかの仲間意識を持って同等か目下の相手に用いられるものである。

参 考 文 献

- 井出祥子 1982 「待遇表現と男女差の比較」『日英語比較講座』第5巻 大修館
井上史雄 1979 「若者の敬語行動」『言語』Vol. 8 No. 6 大修館
北原保雄 1978 「敬語」『論集 日本語研究』9 有精堂
久野 暉 1977 「英語圏における敬語」『岩波講座 日本語 4 敬語』岩波書店
国文学編集部 1977 『あなたも敬語が正しく使える』学燈社
寿岳章子 1979 『日本語と女』岩波新書
鈴木孝夫 1973 『ことばと文化』岩波新書
——— 1982 「自称詞と対称詞の比較」『日英語比較講座』第5巻 大修館
文化庁 1974 「敬語」『「ことば」シリーズ1』
——— 1975 「言葉に関する問答集1」『「ことば」シリーズ3』
Roger Brown and Albert Gilman 1960 *The Pronouns of Power and Solidarity, Style in Language*, Thomas A. Sebeok (ed.), MIT Press.
Roger Brown and Marguerite Ford 1964 *Address in American English, Language in Culture and Society*, Dell Hymes (ed.) New York Harper and Row.
S. M. Ervin-Tripp 1969 *Sociolinguistics*, in L. Berkowitz (ed.), *Advances in*

Experimental Social Psychology, vol. 4.

Robin Lakoff 1975 *Language and Women's Place*, Harper & Row.

Address Terms of Japanese

The purpose of this article is to describe the address terms of Japanese in the form of a flow-chart model used by Ervin-Tripp (1969). The main frame-work of the description is based on Suzuki's pioneering work on the Japanese address system (Suzuki 1973). Because of the complexity of the system, the scope is limited to the adult grammar, formal style, neutral mood, and the address terms included are limited to last name (LN), first name (FN), title (T), kinship terms (K) and occupation (OCP) with the honorific suffixes "san" and "kun" where applicable. This is the first time that this kind of flow-chart presentation model has been applied to the Japanese address terms.